カーボヴェルデのなかのアフリカ

――文化的抵抗としての舞踏バトゥクから歌謡モルナへ――

青木　敬（京都外国語大学嘱託研究員）

はじめに

西アフリカ島嶼国カーボヴェルデ（図 1）は、言語的にも文化的にも、そして人種的な意味においても「クレオール」[1)]の特質をもっている。クレオールとは、植民地生まれの白人や黒人、混血、またはかれらの話す「方言」や言語、文化など、多様な意味をもつ。したがって、世界にはさまざまなタイプのクレオールが存在し、英語ベース、フランス語ベース、ポルトガル語ベース、スペイン語ベースなどのヨーロッパ諸言語をベースとしたクレオール（語）がある。このようなクレオールの意味合いを踏まえ、本稿では、クレオールを、カーボヴェルデ（ポルトガル語ベース）において生じた異種混淆の結果、創造されたあたらしい言語、文化、アイデンティティ、そして人びとという意味でもちいる。この意味は、西谷（2001: 98）のクレオールにかんする定義、すなわち「言語や文化を異にする 2 種類以上の人びとが出逢い、言語や文化が、混成のプロセスのなかから生まれてくる現象の産物」にもとづいたものである。

カーボヴェルデ人はクレオール語を母語とし、国会、新聞、教育、テレビなど、とくに公的の場でポルトガル語をもちいているが、これらふたつの言語には類似性がみられる。たとえば、“Seu país é bonito”（あなたの国は美しい）というポルトガル語の文は、クレオール語では “Téra di nho é bunitu”（Téra=Terra, di=de, nho=seu, é=é, bunitu=bonito）となり、語彙論的類似性がみられる。

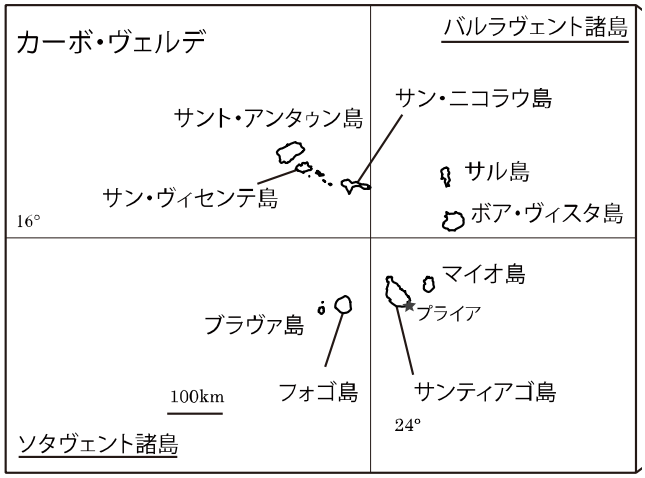

図 1. カーボヴェルデの地図（青木作成）

カーボヴェルデが「クレオール」と表現される背景には、植民地支配と奴隷制が関係している。カーボヴェルデの島々は 15 世紀中葉まで無人島であり、15 世紀後半には、カーボヴェルデに植民し始めていたヨーロッパ人（とくにポルトガル人）と西アフリカ（セネガルからシエラ・レオネまでの地域）から連行された黒人奴隷が混淆し、混血が生まれた。これらの混血の人びとがクレオールである。また、クレ

オール語の形成に関していえば、Quint (2000) が報告しているように、15 世紀末には、カーボヴェルデの黒人奴隷と白人によって、クレオール語がすでに話されていた。16 世紀、大西洋における黒人奴隷貿易が軌道に乗り始めると、ポルトガルの植民地支配者は、西アフリカの黒人奴隷をアンティル諸島、コロンビア（カルタヘナ）、メキシコ、ブラジル（パラ、マラニャウン）、カナリア諸島、スペイン（セビージャ）へ送り(Carreira 2000: 135; 137; 145)、カーボヴェルデはその中継地として重要な役割を果たしていた（図 2）。

そこでカーボヴェルデは、西アフリカ沿岸部から上記のラテンアメリカ地域のあいだでおこなわれた黒人奴隷貿易のためのひとつの中継地として重要な役割を担ったのである。ポルトガル人は、西アフリカからカーボヴェルデへ連れてこられた奴隷に、ラテン語とポルトガル語を教え、キリスト教に改宗させた。これにより、黒人奴隷は取引先であるラテンアメリカにおいて高値で売られたのである。

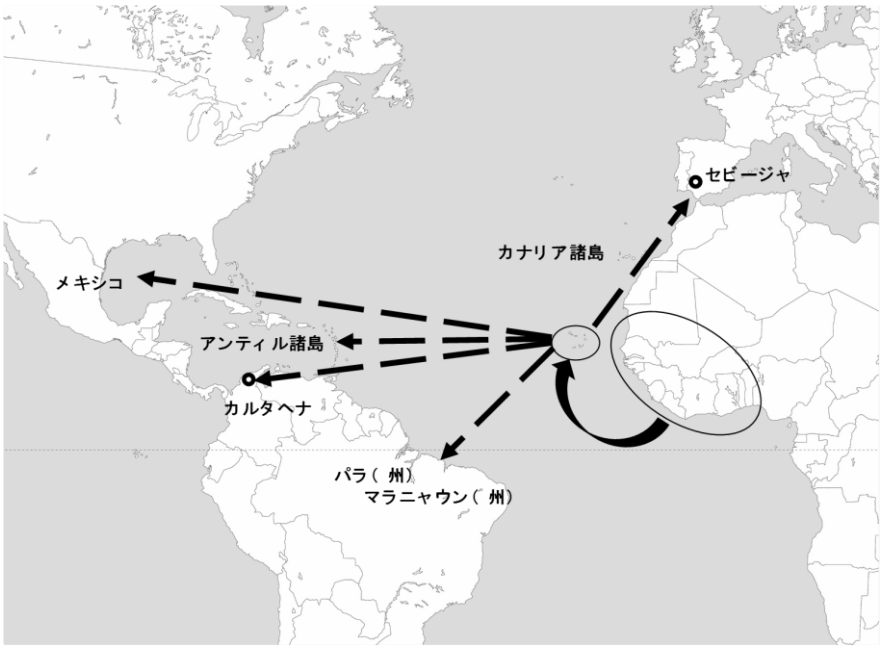

図 2. 西アフリカからカーボヴェルデを経由して黒人奴隷が新・旧世界へと売られた.
（青木作成）

このように考えるとカーボヴェルデは、ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカと歴史的文化的に強い関係があることがわかる。つまり、カーボヴェルデは、これらみっつの地域による強大な影響によってつくりあげられたといっても過言ではない。このように論じれば、中継地であったカーボヴェルデの島々は、ひとの移動が激しい流動的な地域だったと考えることができる。しかし、その激しい流動性が特徴的だった一方、カーボヴェルデには、確実にアフリカの黒人奴隷が継承していった文化の痕跡がみられる。

本稿では、「ブラジルのなかのアフリカ」を対象化することを目的に、黒人奴隷が継承していった文化、とりわけ音楽を通史的に分析する。具体的には、第 1 に、カーボヴェルデのなかのアフリカがどのように表象されたのか、第 2 に、カーボヴェルデのなかのアフリカがどのような歴史文化的プロセスを経てクレオール化したのか、そして最後に、なぜクレオール化する必要があったのかを明らかにする。

本稿でとりあげている鍵概念には、アフリカ性 *africanidade*、カーボヴェルデ性 *caboverdianidade*、ク

レオール性 *crioulidade*[2)]があり、いずれもカーボヴェルデの文化とその社会歴史的発展において重要な概念であるといえる。つぎの Duarte (1999: 26-27) の引用から、かれがもちいるアフリカ性とカーボヴェルデ性の意味が読み取れる。

> ひとの集団の起源がどこなのか、その文化を特定したり定義づけたりすることはできない。カーボヴェルデの場合、もっぱらヨーロッパ的であるととらえてはならず、ブラックアフリカから継承してきたものを否定してはならない。われわれカーボヴェルデ人は、民族的にも歴史的にもヨーロッパと同じくらいにアフリカと関係が深いからである。地理的風土的に、そして大勢の黒人が無人島だったカーボヴェルデの群島へ移動[3)]してきたことなど、アフリカ性の意味において、また、植民地主義とのかかわりあいにおいてカーボヴェルデはアフリカおよびヨーロッパと結びつけられているのである。

上の記述から、Duarte はアフリカ性を、「ブラックアフリカ的な要素」としてとらえていることがわかる。さらに、「カーボヴェルデ性」とは、ヨーロッパとアフリカの双方のさまざまな要素が混ざり合うことで創造されたものであり、ヨーロッパおよびアフリカの双方を「起源」としてもつものという意味として理解することができる。

最後の概念、すなわち「クレオール性」についていえば、これらみっつの概念（アフリカ性、カーボヴェルデ性、クレオール性）のうち、唯一、地理的概念に属していない点で特徴的である。クレオール性という発想自体、マルティニークの知識人たち（シャモワゾー、ベルナベ、コンフィアン）によって 20 世紀末に提唱された。かれらはカーボヴェルデ同様、「クレオール」(*créole*)[4)]である。クレオール性という概念の背景には、地理的概念としてのアンティル性と、アンティル性以前に提唱されていた、ジャマイカ[5)]で起きたラスタファリアニズムのようなアフリカ回帰を重視したネグリチュードといった概念の影響がみられる。しかし、本稿では、アンティル諸島で論じられてきた「クレオール性」の文脈ではなく、カーボヴェルデにおけるクレオール性という限定的な意味に留めたい。つまるところ、カーボヴェルデ史においてみられるクレオール化をクレオール性という語をもってあらわしたい。なぜならば、極めて単純に、本稿のテーマがアンティル諸島ではなく、カーボヴェルデであるためである。さらに、アンティル諸島の「クレオール性」という概念をもちいるには、それが果たしてカーボヴェルデにも同様の現象として、あるいは同様の哲学的思考をもってとらえることが可能なのかを分析しなければならないが、それは本稿の目的からそれる。

本稿でこれらの概念をもちいる根拠は、黒人奴隷制の時代にカーボヴェルデで生じた植民地支配者に対する文化的抵抗のプロセス、すなわち歴史的推移をみるための方法であり、「～性」というように、カーボヴェルデ文化を一元的に特徴づけるためではない、ということを強調したい。

1．カーボヴェルデ人の誕生

無人だったカーボヴェルデの地に多様な人びと（白人と黒人）が送られ、この小さな空間のなかでひとの往来が繰り返された。これが、カーボヴェルデでクレオールが早い時期に形成された理由である。Davidson (1989: 11) によれば、クレオールとは人種を問わず、「植民地生まれのひと」を意味する。かれは、アフリカ人でもなく、ヨーロッパ人でもない、カーボヴェルデ人のアイデンティティをもった人びと（白人、黒人、混血）が 1700 年ごろに形成されたと指摘している。

では、カーボヴェルデ人とは誰を指しているのか。カーボヴェルデ人という場合、カーボヴェルデを

故郷とし、カーボヴェルデで話されている言語、すなわちクレオール語を話すひとのことであり、したがってカーボヴェルデにアイデンティティを見出すひとのことである。そしてアイデンティティを構築するには、カーボヴェルデ人同士による文化の共有が必要である。Peixeira (2003: 61) の以下の記述は、どのように黒人と白人、そして混血が文化を共有するに至ったのか、その要因を示している。

> カーボヴェルデに定着していたヨーロッパ人にせよアフリカ人にせよ、干ばつや飢え、海賊の襲撃から逃れることができずにいた。その最中、白人と黒人のあいだで社会的成層があったにもかかわらず、互いに共通の意識や目的をもつようになり同じ船で航海をした。奴隷と奴隷主が相互理解を図らざるを得ない状況となり、次第に人種差別の壁を乗り越え白人と黒人は〈共存〉し始めた。

表 1. カーボヴェルデでおきた自然災害

年号	飢饉、旱ばつ、噴火などの自然環境による出来事
1680	フォゴ島で地震が起き、噴火口のマグマが流れ、大勢の人がブラヴァ島へ避難する
1719	サンティアゴ島で飢饉が起きる
1773-75	・フォゴ島で大飢饉 ・フォゴ島民の人口が 5,700 人から 4,200 人に減少し、人肉を食すほど飢えていた ・人を売り食料を手にしていた。結果的に 1774 年 9 月から 1775 年 2 月までカーボヴェルデ全体で 22,666 人もの人が亡くなった。また、マイオ島とブラヴァ島では家畜がすべて死に、大衰退した
1790	・バルラヴェント諸島とブラヴァ島で危機に陥る。 ・サントアンタゥン島だけでも 800 人以上もの人が死亡
1810	飢饉に陥る
1813	サンティアゴ島とマイオ島で危機に陥る。内陸部の田舎は壊滅する
1814	ボアヴィスタ島で飢饉が起きる。一部の島民がフォゴ島とサンニコラウ島へ逃亡する
1816	フォゴ島のシャン（おそらくシャン・ダス・カルデイラスを指してい る）北部でマグマが 2 日で海に到達する
1831-33	・すべての島で飢饉が起き、全島でおよそ 30,000 人の死者が出る ・サントアンタゥン島だけで 13,000 人が死ぬ ・1831 年（人口 17,000 人）から 1834 年（人口 6,000 人）までのあいだで人口が半分以上に減少する
1845–46	サンティアゴ島とサンニコラウ島以外の島で雨量が少なく、収穫が不足する
1847	フォゴ島で火山が噴火し、マグマが流れる
1850–51	雨が少なく、収穫に失敗する

（出典：青木 2017: 19 を編集）

カーボヴェルデは 15 世紀から 18 世紀までに幾度となくフランス、英国、フランドル、ドイツの海賊の襲撃を受けている (Peixeira, 2003: 58)。つまり、海賊による襲撃から支配者と被支配者は、ともに逃亡し、共生または共存したことで、カーボヴェルデ人であるという意識が生まれたと考えられる。共生せ

ざるを得なかった状況は海賊のほかに、もうひとつの原因がある。18 世紀初頭には海賊による襲撃が収まるが、それと同時期にカーボヴェルデで深刻な自然災害に悩まされることになる（表 1）。たとえば、1680 年には地震が原因で火山が噴火し、これによりフォゴ島民はブラヴァ島へ避難した。そして 18 世紀から 19 世紀にかけて幾度も大災害、大飢饉が起き、カーボヴェルデの奴隷主、奴隷、自由黒人などのあいだに存在した不当な関係性は、維持できる状況でなかった。少数であった奴隷主は権力を失い、黒人奴隷のアフリカ文化の存在感が徐々に増していった。人びとは生き延びるためにともに生活を送ったのである。次第にその人びとは、共通の意識と共有する文化を創造し、自らの地＝故郷に対して忠誠心 (Davidson 1988: 14) をもつようになり、カーボヴェルデ人が誕生した。Davidson (1988: 32) は、カーボヴェルデ人としてのあらたなアイデンティティを「カーボヴェルデ性」[6]という用語であらわしている。

> カーボヴェルデは均質的な社会へと変化した。カーボヴェルデの人びとは、ヨーロッパ人でもなく、完全にアフリカ人というわけでもない。かれらはカーボヴェルデ人であることに誇りを感じているのである。この『カーボヴェルデ性』は、黒人奴隷とその子孫が創造した文化によって生まれたものであるから誇りを感じることができ、(. . .)したがって支配者の文化とは異なる。

白人と黒人が共存したことによって生まれたカーボヴェルデ人としての共感は、階層間の不当な関係を消化させた。そのなかで絶えず黒人奴隷が継承してきた文化である音楽は重要な役割を果たした。音楽は、黒人と白人による異種混淆が生じたことによってカーボヴェルデの文化として受け継がれていった。これをカーボヴェルデのなかのクレオール化したアフリカとして解釈できる。

次節では、奴隷制時代から伝えられてきた音楽に着目し、カーボヴェルデのなかのアフリカについて考察を加える。

2. 音楽をとおして伝承される「アフリカ性」

西アフリカ音楽を起源とするバトゥク *batuku*[7]は、黒人奴隷がカーボヴェルデへ連れてこられた際に、唯一伝承することができた文化であり、カーボヴェルデ最古の音楽である。バトゥクは 19 世紀までカーボヴェルデ全島で歌われていた。黒人奴隷貿易が大繁栄していた 16 世紀以降は、奴隷に太鼓などの楽器をつくることが許されておらず、また奴隷制廃止後の 20 世紀初頭までは、バトゥクの演奏自体、ポルトガル人によって禁止されていた。アフリカは、ポルトガル人から「未発達の文明」であると考えられ、バトゥクは「黒人の音楽」として侮蔑されてきた。いずれにせよ、不毛の地であったカーボヴェルデには、「楽器をつくるための木材や動物（動物の皮が太鼓をつくるには必要）などが存在しなかった。そのため、夜中になると黒人奴隷は、腿を楽器代わりにもちいて踊ったり歌ったりしていた」(Gonçalves 2006: 19; 24-25)。

バトゥクは、サンティアゴ島の伝統音楽としていまもなお演奏されているが、奴隷制時代（とりわけ 16 世紀～18 世紀）におけるバトゥクは、フィナソン *finaçon* と呼ばれる歌の形式が主流であった。Hurley-Glowa (1997) によれば、フィナソンは音楽ジャンルというより、詩の朗読に近く、即興でおこなわれる。また、フィナソンの歌い手は、神、倫理、良きおこない、教育など、日常生活のなかで必要な知識や思想について語る (Nogueira 2015: 37-38 からの引用)。

アフリカ音楽バトゥクにかんするこれらの記述をみただけでわかるとおり、植民地支配者は黒人文化を否定的にとらえていた。これは植民地主義政策において至るところでみられる。前節で説明した、カ

ーボヴェルデで起きた自然災害（干ばつ、地震、火山の噴火）と海賊の襲撃によって、白人と黒人、混血の共存という過程を経て、カーボヴェルデ人という共通意識が生まれた。しかし、その一方で、19 世紀における植民地支配、そして継続的に起きた自然災害と海賊の襲撃といった厳しい環境下において、バトゥクを伝承していくことは困難であり、アフリカ起源の伝統文化を継承していくことは容易ではなかった。

3．クレオール化したアフリカ性の発展——舞踏バトゥクから歌謡モルナへ

Martins (1988: 138) がおこなった聞き取り調査によれば、「1860 年の議事録において、市役所に勤めるソリス氏が『モルナ』と呼ばれるバトゥクに対して抗議していた」。この歴史的事実から、カーボヴェルデ人は植民地支配者に制御されることがない、べつの音楽を創造してきたことがわかる。その音楽こそがモルナ *morna* であった。モルナとは、現在、カーボヴェルデを代表する歌謡の名前であり、一説によれば、ボアヴィスタ島で演奏されていたバトゥクが発展したことで誕生したとされる (Gonçalves 2006: 80)。

この凄惨な歴史のなかで、精神的苦痛を抱えていた黒人奴隷は『マリ・シェタンティーナ』という曲を歌った (Lima 2002)。Lima (2002: 209-210) によれば、この曲は 1785 年ごろにつくられ、奴隷が置かれた状況の心的苦痛をあらわしている。その歌詞は残されていないため、支配者の言語であるポルトガル語で歌われたのか、あるいはかれらの母語であるクレオール語で歌われたのかは不明である。モルナ研究者 Dias (2011: 106) の聞き取り調査によれば、「ボアヴィスタ島の黒人奴隷のあいだでは、歌詞がないメロディーのみが演奏され、それは悲観、ノスタルジア、苦悩について表現していた」。ここでは、モルナが黒人奴隷の精神的苦痛が込められたメロディーであることが重要である。奴隷によるセンチメンタルに歌われたモルナは、ときに遠い母国アフリカを想って歌われることもあった (Lima 2002: 226)。

興味深いことは、これらの奴隷がアフリカから連れてこられた奴隷だけではないということである。Dias (2011 :106) の聞き取り調査によれば、ボアヴィスタ島には西アフリカの奴隷以外に、ブラジルから送られた黒人奴隷もいたという。ブラジルから売られてきた奴隷がどこを母国と感じていたかは不明であるが、間違いなく西アフリカの黒人奴隷同様、精神的苦痛を抱えていたはずである。

さて、黒人奴隷たちの精神的苦痛の想いは、奴隷によって「ソダーデ」*sodade* という語で表現された。ソダーデとは、一般的に「郷愁」という意味でもちいられるポルトガル語のサウダーデ *saudade* から派生した。音楽をとおして表現される「サウダーデ」と「ソダーデ」では、歌い手の心情が異なるが、ここでは詳細には立ち入らない。カーボヴェルデ人は、ポルトガル語由来であるソダーデという語をモルナの重要な要素として組み込むことによって、みずからのアフリカ性を継承することにつながったことが考えられる。カーボヴェルデの奴隷はソダーデを抱くことで、精神的苦痛からの解放とカタルシスを感じた。

また、黒人奴隷の文化を継承するために、モルナに組み込まれたあたらしい音楽がある。音楽学者 Martins (1988: 44) によれば、「17 世紀、詩人 Caldas Barbosa がブラジルのルンドゥン[8)]をリスボンのサロンで流行させ、次第にカーボヴェルデへ伝えられるようになった」。また、「1800 年ごろには、ブラジルのモジーニャ *modinha* の影響が強かった」ことも示している（Martins 1988: 46）。ブラジルのモジーニャとルンドゥンがカーボヴェルデに伝わり混淆したことにより、ボアヴィスタ島で歌謡モルナが形成された。つまり、黒人奴隷は、バトゥクに代わり、モルナのなかに自身のアフリカ文化と支配者のポルトガル的要素を融合させることで、かれらの「伝統」を創造したと解釈することが可能である。

次第に、モルナはほかの島へと伝播し（ボアヴィスタ島→ブラヴァ島→サン・ヴィセンテ島→全島）さらなる発展を遂げた（青木 2017: 137）。ブラヴァ島では、白人の上流階級者によってモルナがクレオール語とポルトガル語で歌われ、ポルトガルの要素が取り入れられた。

サン・ヴィセンテ島へモルナが伝播した20世紀初頭になると、モルナは全島民に共有された。モルナの形成以前までは、バトゥクがカーボヴェルデ全島に根づいていたが、カーボヴェルデ人のあいだで共有することができる唯一の文化としてモルナがクレオール文化を表象するに至った。その最大の理由は、すべての歌がクレオール語で作詞されたからである。これがカーボヴェルデにおけるポルトガル人に対する文化的抵抗であったことは明らかである。これらの分析から、カーボヴェルデ人は植民地支配者に制御されない、あたらしい音楽の創造に成功したと考えられる。

おわりに

本稿は、「ブラジルのなかのアフリカ」を対象化させることを目的に、カーボヴェルデにおけるアフリカ性について、音楽とのかかわりにおいて通史的に分析した。とりわけカーボヴェルデにおける奴隷と支配者の歴史的過程のなかで、どのようにアフリカ音楽は継承されていったのかをみた。以下、本稿の目的にかんして重要であった点をまとめる。

第1に重要な点は、白人（支配者）、黒人と混血（被支配者）が、海賊の襲撃と自然災害が原因で共存せざるを得ない状況下に陥ったことである。このときに、奴隷主と奴隷という不当な関係が意味をなさなくなり、かれらが共存したことで「カーボヴェルデ人」という共通のアイデンティティが生まれた。それは同じクレオール語を話し、カーボヴェルデという地を故郷と感じはじめたことを意味する。

第 2 は、大多数であった黒人奴隷がアフリカ文化を継承していったことである。具体的には、バトゥクと呼ばれる音楽がアフリカ文化を表象し、のちにモルナに移行するまでカーボヴェルデのアフリカ性を担った。

第3は、カーボヴェルデ人によって、バトゥクがモルナと呼ばれる歌謡へ発展したことである。ポルトガル人によってバトゥクが制御されたことで、バトゥクが表象していた「アフリカ性」をモルナに転換させた。それにより、ポルトガル語由来である「ソダーデ」という、センチメンタルな想いをあらわす語をモルナに組み込むことによって、アフリカ文化をカーボヴェルデのクレオール文化に転換させた。

第 4 は、クレオール語で歌われるモルナがカーボヴェルデ人のあいだで大衆化したことである。モルナがカーボヴェルデ人のあいだで唯一共有できる文化として機能したことにより、カーボヴェルデ人はモルナを支配者に対しては「アフリカ性」として、アフリカに対しては「クレオール性」として、表象させたのである。このことは、カーボヴェルデ史にみられる最大の文化的抵抗であった。また、多層的な文化を構築し、継承したという事実は、カーボヴェルデ人が否定的にとらえられていたクレオールをみずからのアイデンティティとして受け入れることができたことにも多分に関係していることであろう。

【注】

1）ポルトガル語ではクリオウロ *crioulo* という語であらわされるが、本稿では日本語で馴染み深い「クレオール」の語をもちいる。

2）ここで論じる「クレオール性」という語はアンティルの知識人によって提唱された「クレオール性」*créolité* と必ずしも一致しないことには留意する必要がある。地理的にアフリカに位置するカーボヴェルデのクレオール性と、アンティル諸島の人びとがアフリカへの帰還といった歴史背景があるなかで芽生えた概念としてのクレオール性では、思想が異なるのは当然のことである。ただし、クレオールの

ひとによってその異種混淆性を肯定的にとらえる点においては、カーボヴェルデもアンティルの人びとも、同様の出発点に立っているといえる。

3）黒人奴隷貿易の文脈であるため、移動というよりは、白人によって連れてこられたといったほうが適切である。

4）マルティニークのクレオールはフランス語ベースであるため、*créole* としている。ちなみに英語ベースだと *creole*、スペイン語ベースであれば *criollo* という。

5）ジャマイカはパトワと呼ばれるクレオール語を話し、英語ベースのクレオールに当てはまる。なお、ここで「パトワ」と記していることは、クレオールという語同様に、差別的な意味でないことを強調したい。

6）Davidson (1988) は英語で 'Cape Verdeanness'と記しているが、この語はカーボヴェルデ研究の文脈のなかでしばしば表現される 'Caboverdianidade' (Duarte 1999; Brito-Semedo 2006) というポルトガル語の訳をあてたものである。

7）カーボヴェルデのクレオール語では 'batuku' という語をもちい、ポルトガル語では 'batuque' と書かれる。本校では、カーボヴェルデのバトゥクについてのみ触れていることを踏まえ、Nogueira (2015: 18) の用語法を採用している。すなわち 'batuku' とは「サンティアゴ島の伝統として考えられている音楽」であり、'batuque' はアンゴラやブラジルなどのポルトガル語圏諸国にみられる音楽の一種である。その歴史的背景について Nogueira (2015: 23) は「ポルトガルの旧植民地だったブラジルやアフリカで、ポルトガル語の 'batuque' という単語は、黒人の音楽、または舞踏を意味していた」という。これに加え、ブラジルでは 'batuque' が宗教的特徴と強く結びつけられていることを考えれば、これらの用語法については議論の余地があるが、ここではカーボヴェルデの 'batuku' を 'batuque' と混同しない根拠だけに留めておく。

8）原著には *doce lundum chorado* と記されている。ルンドゥンは元来、アフリカ起源であるといわれているが、ブラジル人である Barbosa が手がけていた音楽は *doce lundum chorado* と呼ばれていた。ルンドゥンという語自体も、*lundum* のほかに、*lundú* や *landú* などさまざまな綴りが存在する。

【参考文献】

青木敬（2017）『カーボ・ヴェルデのクレオール—歌謡モルナの変遷とクレオール・アイデンティティの形成—』、京都大学アフリカ研究シリーズ 018 号、松香堂書店。

西谷修（2001）「〈クレオール〉の多義性」『総合文化研究』(4): 98-108。

BERNABÉ, Jean, CHAMOISEAU, Patrick, CONFIANT, Raphaël (1993). *Éloge de la Créolité*, Paris: Éditions Gallimard.（ベルナベ、ジャン、シャモワゾー、パトリック、コンフィアン、ラファエル（1997）『クレオール礼賛』、恒川邦夫（訳）、平凡社）

BRITO-SEMEDO, Manuel (2006). *A Construção da Identidade Nacional: Análise da Imprensa entre 1877-1975*, Praia: Instituto da Biblioteca Nacional e do Livro.

CARREIRA, António (1984). *O Crioulo de Cabo Verde: Surto e Expansão*, Lisboa: Gráfica Europam.

CARREIRA, António (2000). *Cabo Verde: Formação e Extinção de uma Sociedade Escravocrata (1460 – 1878)*, Terceira Edição, Estudos e Ensaios, Praia: IPC.

DAVIDSON, Basil (1989). *The Fortunate Isles: A Study in African Transformation*, Trenton: Africa World Press.

DIAS, Braz (2011). "Cape Verde and Brazil: Musical Connections", *Vibrant*, 8 (1): 95-116.

DUARTE, Manuel (1999). *Caboverdianidade e Africanidade e Outros Textos*, Mindelo: Spleen.

GONÇALVES, Carlos Filipe (2006). *Kab Verd Band*, Praia: Instituto do Arquivo Histórico Nacional.

HURLEY-GLOWA, Susan (1997). *Batuko and Funana: Musical Traditions of Santiago, Republic of Cape Verde*, Doctoral Thesis, Brown University.

LIMA, António Germano (2002). *Boavista, Ilha da Morna e do Landú*, Praia: Instituto Superior de Educação.

MARTINS, Vasco (1988). *A Música Tradicional Cabo-Verdiana-I (A Morna)*, Praia: Instituto Caboverdiano do Livro e Disco.

NOGUEIRA, Gláucia (2015). *Batuku de Cabo Verde: Percurso Histórico-Musical*, Praia: Pedro Cardoso Livraria.

PEIXEIRA, Luís Manuel de Sousa (2003). *Da Mestiçagem À Cabo Verdianidade: Registos de uma Sociocultura*, Lisboa: Colibri.

QUINT, Nicolas (2000). *Le Cap-Verdien : Origines et Devenir d'une Langue Métisse*, Paris:L'Harmattan.